日本人学生の台湾留学

国立嘉義大学（台湾）　林 明煌
LIN Ming-Huang

台湾は、アジア大陸の東南沿岸、太平洋の西岸に位置する島であり、日本から1,500キロメートルの距離にある。面積は合わせて35,873平方キロメートルで、日本の九州と同じぐらいであるが、総人口は約2,300万人である。戦前、日本植民地時代において皇民化教育を受けたお年寄りの多くが親日派である一方、戦後、ケーブルテレビによるマスコミの影響で、日本の人や物などを好きになる若者を中心とする「哈日族」が現れている。また、1999年９月21日に発生した「921大地震」においては、日本のレスキュー隊が他の国より早く被災地に到着し、破壊した建物の瓦礫の中から怪我をした台湾人を救う場面が、マスコミを通して台湾の人々に感動を与えた。恩返しのため、東日本大震災の発生後、台湾人は、200億円以上の義捐金を募集して寄付した。このような親日国は、世界にはあまりないであろう。

台湾で使っている漢字は、中国の省略字と異なり、ほぼ日本の漢字と同じである。また、第二次世界大戦後、中華料理の四体系と世界各国の料理が台湾に進出したこともあり、台湾は、日本人にとっていい留学環境であるといえる。

一、台湾の高等教育の制度

台湾では、2012年度、162所大学院校（総合大学、単科大学と専門学校を含む）が高等教育を提供している。その中の、148所大学院校が研究者養成を目的にする研究所（日本の大学院に相当）を設置している。大学生や院生の中に将来海外留学を目指す者が少なくない。日本学生支援機構「平成23年度外国人留学生在籍状況調査結果」によると、日本に滞在している台湾留学生の数は約4,571名、中国と韓国に次いで、外国人留学生在籍の第３位を占めている。

台湾には、国立総合大学の21校、私立総合大学の29校、国立芸術大学の３校、国立体育大学・学院の３校、私立医薬大学・学院の５校、私立管理学院の２校、以上63校の大学を「一般系大学」と分類している。この他、国立師範大学が３校、国立教育大学の５校を「師範大学」と分類し、以上71校の大学は、全国統一の「大学入学指定科目試験」（大学指考と略称）により選考する受験システムとなっている。それ以外の国立科技大学12校、私立科技大学の40校、国立技術学院の３校、私立技術学院の21校、国立専科学校の２校、私立専科学校の12校、以上90校の「技術系大学」は、全国統一の「四技二専入学統一試験」（四技二専統測と略称）により別に選考するシステムとなっている。この他、軍関係の７校、警察関係２校及び宗教法人学校４校の高等教育機関が設けられているが、これらは独自の入試システムにより、個別に選抜している。

大学の入学方法として、毎年約15万名が１月末から２月初旬に実施される全国統一の「大学学科能力試験」（大学学測と略称）を経、約７万名の受験者が７月上旬に実施

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

される大学指考を目指す。2012 年度、88%の受験者が合格しており、これとは別に約 15 万名の受験者が５月上旬に参加する四技二専統測が存在している。

実は、大学学測の科目の多くは、その得られた成績が一般系大学の推薦に重要な参考資料として用いられている。大学推薦から落ちた普通高校の生徒がまた大学指考に参加し、その成績によって希望したい大学に再配分される。これに対して職業高校の生徒は、まず四技二専統測に参加し、その成績と学校の成績を合わせて職業系大学に推薦・申請したり、自ら希望した大学に配分されるルートしかない。

外国人の大学院入学の方法には、「審査制」と「試験制」がある。審査制とは、留学生が入学願書、大学の卒業証明書と成績証明書、研究計画及び他の資料などを大学院の窓口へ送った上で、大学の審査によって入学の許可がもらえるシステムである。試験制は、上述した資料の審査だけでなく、大学院入学共通試験にも合格しなければならない。近年、大学国際化のため、審査制の大学院の数が大幅に増えている。

二、台湾の外国人留学生政策

台湾教育部（日本の文部科学省に相当）の「外国学生入学法」第７条によると、外国人留学生は入学願書、学歴証明書、成績証明書や滞在中の経済能力証明書及び他の書類などを提出して入学許可をもらうのが一般的である。ただし、社会人の有職者を対象にする大学の夜間部や在職修士課程に入学することはできない。

一方、台湾の学校教育制度は２学期制で、上学期（１学期）が９月～１月下旬、下学期（２学期）が２月中旬～６月である。７月と８月が夏休みで、１月下旬～２月中旬が冬休みに入る。入学の申請が 10 月までに完了できないとすれば、外国人留学生は下学期や次の学年に入学しなければならない。

他方、入学の許可書をもらった上で、それを所持して日本での台北駐日経済文化代表処に留学ビザを申請する必要がある。また、台湾に来た後、地方の「戸政事務所」へ行って在留登録をする義務が課される。留学中、犯罪をしたり、成績や履修の単位数が最低の基準値に達していなかったりした場合、退学させられなければならないということが要注意である。

更に、「外国学生入学法」第 15 条によると、外国人の台湾への留学を促すため、優秀な外国人留学生を対象にした「台湾奨学金」、「華語文奨学金」と「短期研究助成金」が設けられている。また、各大学が様々な「外国学生奨学金」を設置して外国人留学生を募集することが一般的である。

「台湾奨学金」は、台湾の教育部が 2004 年に設置した、優れている外国人留学生を対象にする奨学金で、毎年４万元以内の学費と毎月 1.5 万元～２万元の生活費を提供する台湾政府の奨学金である。台湾では、大学の入学料が要らないため、その金額は、外国人留学生の台湾での日常生活と大学での学習を支える基本的な金額である、と考えられる。台湾奨学金の最大期限は、大学学部が４年間、修士コースが２年間、博士コースが４年間である。申請の書類には、①奨学金申請書、②パスポートの写し、③最高学歴の卒業証明書、⑤成績証明書、⑥入学許可書、⑦初級以上の中国語能力証明書や英語能力証明書などがある。締め切りは、毎年３月 31 日までで、受付は、台北駐日経済文化代表処である。

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

「華語文奨学金」は、外国人が台湾で中国語を勉強することにより、台湾の文化と社会を理解し、世界各国との交流と相互理解を促進することを目的とする短期的な奨学金である。この奨学金は、２カ月、３カ月、６カ月、９カ月、１年間という５類型に分け、毎月2.5万元の生活費を支給する奨学金である。申請には、初めて台湾に留学する外国人で、高校以上を卒業した18歳以上の外国人留学生であることが条件となる。ただし、大学姉妹校の交換留学生や他の奨学金をもらっている人は除外される。申請の書類には、①奨学金申請書、②パスポートの写し、③学歴と成績の証明書、④台湾での中国語センターの入学許可書、⑤その他の資料がある。受付は、日本での台北駐日経済文化代表処である。

「短期研究助成金」は、博士課程の外国人院生と博士学位を取得した外国人研究員を対象にする短期的な研究助成金である。定員が20名～40名であるが、会計年度の予算によって毎年の定員数が決まる。台湾での滞在期間は、２カ月～６カ月に限られ、できれば毎年３月１日から12月31日までの間であることが望ましい。研究者の専門領域は、台湾の人文、社会科学、文化、芸術などの領域だけに限られる。短期研究助成金は、毎月院生が2.5万元、研究者が４万元で、また日本－台湾の往復航空券（エコノミー）一回分を補助する。助成金の申請者は、毎年９月30日まで、①奨学金申請書３通、②在学証明書（院生）や博士号のコピー（研究者）、③推薦状２通を台湾の大学に提出し、その許可をもらった上で、大学の協力で④中国語版の研究計画を教育部に提出しなければならない。

以上は、台湾政府が支給している奨学金と研究助成金である。一方、台湾の各大学は、大学の国際化を図り、優秀な外国人留学生を募集するため、高額な奨学金や学習助成金を提供することがある。しかし、申請者の条件、手続き及び奨学金・助成金の金額は大学によって異なる。次は、筆者が勤務する国立嘉義大学を例にして説明する。

三、国立嘉義大学と日本の大学との学生交流

国立嘉義大学（以下、嘉義大学）は、台湾の南部にある国立総合大学で、有名な観光地である阿里山国家公園の入り口にある。2000年に国立嘉義師範学院と国立嘉義技術学院を合併して成立し、現在、師範学部、人文･芸術学部、管理学部、農学部、理工学部と生命科学部という６学部を有する。農学部の前身は、日本植民地時代における嘉義農林高校であり、甲子園に出場し、準優勝をしたことがある。大学には、蘭潭キャンパス、民雄キャンパス、新民キャンパスと林森キャンパスがあり、合計面積が285.9ヘクタールである。2012年度、学生の数が１万３千人ぐらいで、教師の数が約500名である。

嘉義大学は、海外における大学との学生交流と教師の研究連携を促進するため、近年、姉妹校として海外の大学50校と交流協定を締約した。その中に、日本の高知大学、上越教育大学、明治大学、長岡技術科学大学及び酪農学園大学などが含まれる。嘉義大学は、日本ではあまり知られていないため、2012年度の外国人留学生285名の中に、日本人留学生は３名しかない。現在、園芸学科、視覚芸術学科と獣医学科に在学している日本人留学生の存在は大学側と地方の人々によって重要視されている。

嘉義大学では、日本の姉妹校との学生交流が非常に重要視されている。例えば、毎

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

年、上越教育大学の北條礼子教授が、数十名の教育実習生を率いて嘉義大学付属小学校で教育演習を行っている。そして、嘉義大学付属小学校の教師が、児童を連れて上越教育大学付属小学校を訪問し、授業体験活動や国際交流活動に参加することが特色である。今後、嘉義大学教員養成センターの履修生が、上越教育大学とその付属小中学校を訪問したり、授業参観や学生交流を行ったりすることが計画されている。

この他、各大学院の先生が、毎年大学生や院生を連れて日本の姉妹校と交流したり、国際的シンポジウムを共同開催して論文を発表したりすることがたくさん行われている。また、中国語のできない外国人留学生を対象にする国際学位課程が提供されており、英語による授業展開が義務化されている。更に、留学生が中国語能力を取得し、台湾社会と文化への理解を促進するための華語文講座が提供されている。

一方、優秀な外国人留学生を募集してその学習を支える方法として、奨学金や学習助成金が設置されている。奨学金を申請するには、上述した「台湾奨学金」、「華語文奨学金」と「短期研究補助金」をもらっていない外国人留学生が、①入学申請書、②学歴と成績の証明書、③パスポートの写し、④健康診断証明書、⑤推薦状、⑥財力証明書及び⑦学習計画や研究計画などの入学の書類を嘉義大学へ提出しなければならない。そして、入学許可書をもらった上で、所属の学科や研究科の協力で、奨学金や学習助成金の申請書及び成績証明書を差し出す必要がある。ただし、外国人留学生の学力を測るため、日本の成績証明書に示されているA、B、C、D、Eという評価尺度は、欧米の大学や高校で使用されているGPA（Grade Point Average）に変換されなければならない。また、大学の奨学金や学習助成金を取得した外国人留学生は、所属の学科や研究科で事務や研究を手伝うことが義務化されている。

四、日本人学生の台湾留学の現状と課題

台湾の教育部（日本の文部科学省に相当）の統計資料によると、2009年度の外国人留学生の数が合計34,285名で、約８割は台湾北部の大学に集中している。その中に、日本人留学生が合計2,438名で、全体の7.1%を占めている。内訳を見ると、学位の履修生が403名（16.5%）、中国語講座の履修生が1,739名（71.3%）、交換留学生が220名（9.0%）、華僑生（外国籍を持っている中国人）が76名（3.1%）である。すなわち、日本人の台湾留学の目的は、各大学や言語教育センターで中国語を学ぶことが主流である。筆者が台湾での留学生活について10名の日本人留学生とインタビューした結果、以下のことが整理できる。

第一は、言語の問題である。日本人留学生の台湾での留学生活にとって一番重要なことは中国語の習得である。台湾では、中国語を駆使して大学の授業を展開することが主であるが、国際学位課程や国際学部での授業は、殆ど英語によるものである。すなわち、大学で、英語や中国語でレポートを書いたり、発表をしたりすることが必要であるため、中国語や英語の習得が日本人留学生にとっては大切な課題である。

第二は、交通手段である。日本人留学生は、主に大都市の大学に集中している。その理由の一つが大都市の交通の便利さである。台湾の大都市は、電車、バスやMRTなどの公共の交通手段のネットワークを整備していて、また国際空港に近いので、外国人留学生が集まりやすい。ところが、2007年に台北－高雄の高速鉄路（新幹線）の開通

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

以来、地方都市の大学に留学する日本人も増えている。地方都市では、市外への電車や市内バスの本数があまり多くない。日本の運転免許証と併せて、その中国語翻訳文（入手方法等は交流協会のホームページ参照 http://www.koryu.or.jp/taipei/ez3_contents.nsf/17/CB36FCB17C294AE7492574C8002298CB?OpenDocument）を所持・携帯していれば、自動車の運転が認められるため、毎日バイクや車で大学に通っている日本人留学生の数が増えている。ただ、交通事故に遭遇して怪我をする日本人留学生も増えている。

第三は、トイレの使用である。台湾の大学と宿舎では、トイレの中にトイレットペーパーが付いていないのが一般的である。はじめて台湾に留学する日本人にとってはそれが一番不便なことであろう。近年、環境保護のため、使用したトイレットペーパーをそのまま便器に捨てることができないため、トイレの中に必ず屑箱が置いてある。しかし、こうしたトイレ文化が日本と異なり、それに慣れていない日本人留学生が非常に多いのである。

第四は、飲食の問題である。台湾では、仕事が終わって家族を連れて外食する人が非常に多い。一般的には、レストランよりも庶民的な屋台の方が人気である。夜になり、屋台で食事したり、買い物したりする人が缶詰のようになり、衛生面の問題が生じる。一方、台湾の至るところには、綺麗で料理が美味しいレストランが数多くあり、屋台の飲食に慣れていない日本人留学生は、レストランで食事する方がよい。

第五は、外国人への思いやりと優しさである。日本人留学生が帰国して忘れないことが台湾人の人情味である。外国人への優しさが台湾の社会文化の一つであり、能動的に外国人を助けたり、案内したりすることが特徴である。この文化は、北部より南部の方が強い。にもかかわらず、日本人留学生の大半は北部の大学に集まる。

最後になるが、北部の大学より南部の大学の方が日本人留学生の存在を重要視する傾向にあり、交通の便や生活環境もよくなってきているので、南部の大学での留学も促進されてほしいと切に願う。

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.